

第 13 回世界核医学会 開催結果報告

1 開催概要

- (1) 会議名 : (和文) 第 13 回世界核医学会学術大会
(英文) 13th World Congress of Nuclear Medicine and Biology
- (2) 報告者 : 第 13 回世界核医学会 会長 絹谷 清剛
- (3) 主催 : 一般社団法人日本核医学会、日本学術会議
- (4) 開催期間 : 令和 4 年 9 月 7 日 (月) ~ 9 月 11 日 (金)
- (5) 開催場所 : 国立京都国際会館 (京都府京都市)
- (6) 参加状況 : 75 ヲ国・地域 2,150 人 (国外 362 人、国内 1788 人)

2 会議結果概要

- (1) 会議の背景(歴史)、日本開催の経緯 :

世界核医学会は全世界の核医学診療・研究の推進・発展ならびに各国の研究者の交流を目的として 1964 年に設立された。学会員の総意として 4 年に一度、世界核医学会 (World Federation of Nuclear Medicine and Biology, WFNMB) が開催される。総会の誘致に向けた 4 年にわたる活動が実り、2022 年に京都で開催されることとなった。第 1 回大会は 1974 年に東京/京都で開催され、この度、約半世紀ぶりに我が国が主催での開催となった。

第 1 回大会後、この分野の発展はめざましいものがあり、人類の健康促進・医療に大いに貢献するに至った。現在は先進国から発展途上国へと核医学診療が普及し、がんの早期診断と治療、高齢化社会における認知症の早期診断をはじめとして、現代の医療に深く根付いており、第 3 期がん対策推進基本計画 (2017 年)、がん診療連携拠点病院等の整備に関する指針 (2018 年) においては核医学治療の整備と推進が企図された。このことは、核医学診療の充実が国民の健康増進に不可欠であると国が認識を新たにすることを意味する。また、核医学は原子力や放射能の問題にも密接に関係しており、福島原子力発電所の事故に起因する放射線問題は、日本核医学会においても重要課題として取り組んできた。これらは、我が国にとどまらず広く世界の核医学関係者の共通認識である。

このような背景の中で、第 13 回大会は、Summarize the past half century and discuss the next half century of WFNMB をメインテーマとして開催された。

- (2) 会議開催の意義・成果 :

本国際会議を日本で開催することは、世界各国の核医学医師・診療放射線技師・薬剤師・医学物理士・その他の関連医療従事者および研究者に対し、我が国のプレゼンスを示す絶好の機会となった。また日本のこの分野の研究者に世界の多くの研究者と直接交流する機会を与えることとなり、日本の核医学に関する研究を一層発展させる契機となった。

- (3) 当会議における主な議題 (テーマ) :

第 13 回世界核医学会は、「Summarize the past half century and discuss the next half century of WFNMB」「過去半世紀の間、日夜研鑽を続けた世界の核医学の歴史を振り返り、

未来に向けた今後半世紀の世界の核医学について議論し広く発信すること」をメインテーマとした。

(4) 当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割：

「認知症の超早期診断」「前立腺癌の核医学治療」「人工知能への期待」「画像標準化」「機器開発」「核医学の未来」「社会経済への貢献」等を主要題目として、研究発表と活発な討論が行われた。特に近年、世界的に大きな注目を集めている核医学治療に関して、国内外の最新の知見に関する活発な議論が行われ、日本が積極的に開発を進めている核医学治療の研究成果は海外研究者に大きなインパクトをあたえた。その結果、核医学治療に関する研究において、日本と欧米諸国との間でのさらなる活発な研究交流の礎となった。また、当会議では日本が主体となり発展途上国の参加者に対する教育活動、研究交流の機会を多く設け、発展途上国の核医学診療の普及・発展に大きく貢献した。

(5) 次回会議への動き：

次回会議は 2026 年にカルタヘナ(コロンビア)で開催される。当会議の主要題目でもあった核医学治療が今後も飛躍的に発展することが見込まれており、次回会議でも中心テーマの 1 つとなる予定である。また、本会議において発展途上国での小児核医学の普及の必要性が認識された結果をふまえ、発展途上国における小児核医学の教育・普及も次回会議の 1 テーマとなることが想定される。これらのテーマは日本がイニシアチブを有する分野であり、次回会議でも日本が中心的役割の一旦を担うこととなる。

(6) 当会議開催中の模様：

新型コロナウイルス感染拡大により、全世界的な行動制限が残る中での開催であったが、現地には 100 名を超える国外からの参加があり、リアルな接触やコミュニケーションが制限されている中で、世界各国の研究者との自由な交流を行える貴重な機会となった。またオンライン配信においては世界各国からの多くの視聴者があり、全世界に向けて広く学術研究、教育の機会を提供することができた。

(7) その他特筆すべき事項：

カナダ・バンクーバー、韓国・ソウルとの競合を経て、コロナ禍前の 2016 年に京都市への誘致に成功した。決定にあたっては、日本が核医学分野における世界的な発展・普及への貢献が抜き出ていること、および、京都が世界的にも魅力的な都市であり、かつ、国際会議の経験豊富なことがポイントとなった。

2013 年の誘致活動開始以降 2022 年の大会開催まで、世界で開催された関連国際会議において継続してプロモーションを実施した。それらに際して、日本政府観光局 (JNTO) からいただいた有形無形のサポートが、海外研究者へのアピール度増大に有益であった。

上記の 10 年弱の誘致～プロモーション活動期間において、海外ツーリストの日本国内でのオプションツアーに対する要望が大きく変化したと思う。大会事務局としてこのことを把握し対処したとは思いますが、このような変化を端的に知ることのできる資料が、大会開催者が容易に気付くように継続してタイムリーに JNTO などから発出されると非常に有益であると考える。

3 市民公開講座結果概要

(1) 開催日時:2022 年 9 月 4 日(日) 13:30～16:00

(2) 開催場所:京都教育文化センター

(3) 主なテーマ、サブテーマ

みんなで闘おう！認知症とがんの最前線

- (4) 参加者数、参加者の構成:
30名 一般市民、医療従事者
- (5) 開催の意義:
認知症とがんをテーマとして、病気と闘うために必要なことについて、医療面だけでなく周りのサポートの重要性について、市民への啓発を行った。
- (6) 社会に対する還元効果とその成果: (その他開催にあたり工夫した事項 等)
市民の関心の高い癌の治療とアルツハイマー病の診断・治療の導入をテーマとし講演を行った。
国内への新規核医学診療の国内導入に対して医師からの講演、患者会からはがんを患われ、望ましい治療を模索されたときの経験や、新薬導入などに関わる活動の経験について講演をお願いした。核医学の診療、病への向き合い方について市民への有意義な情報提供を行うことができた。
- (7) その他:
会期終了後に動画配信サイトでの公開を行い、現地に参加できない市民に対しても広く情報発信を行った。

4 日本学術会議との共同主催の意義・成果

日本学術会議との共同主催により、開会式において天皇陛下よりお言葉を賜れたことは、会を成功裏に進められた大きな要因となった。このことは、大会が国にサポートされていることを国内外関係者に強く印象付けるものであり、関係者の鼓舞に繋がったと考える。また、会場費等の援助を受けられたことは、運営費を節約することができ、充実した内容を参加者に提供することができた。さらに、市民公開講座を開催し、広く市民へ成果を還元できたことも、共同主催の賜物と考えられる。



